

岩田知夫による評論の特質とその時代背景

-川添登編集長時代における『新建築』誌の記事・評論の分析を通じて-

Characteristics of criticism by Tomo Iwata and era background

- Through the analysis of articles and criticisms of "Shinkenchiku" magazine during Editor-in-Chieko Kawazoe -

○川股悠大¹ 田所辰之助²

*Kawamata Yudai¹, Tadokoro Shinnosuke²

Kawazoe Noboru was active with the goal of establishing architectural journalism at the editor-in-chief. Behind the activity there was a critique written by Kawazoe using the pen name "Iwata Tomo". Iwata's criticism was characterized by a multilateral perspective in the Japanese architectural world. This characteristic view was trying to transform the architectural world in the trend of the era when it changed from postwar reconstruction to high economic growth. Iwata became a pipe with the outside of the building industry, and Kawazoe, who aimed to establish architectural journalism using it, could be said to have one side like an architect rather than just a compiler.

1. 序章

1953 年以降の川添登が編集長を務めた期間の『新建築』誌は現代のものとは異なった誌面構成をしている。それは建築の図面や写真を掲載する写真集の様な印象を受けるようなものではなく、読者や芸術家などを巻き込み評論を展開するような誌面構成であった。

1.1 既往研究

この時代の『新建築』誌では様々な論争が展開され、評論を主体とした誌面がつけられていたとされている。川添登は編集長としてその渦中に存在し伝統論争を初めとした論争の仕掛け人であった。加えて、「岩田知夫」というペンネームを用いて川添登が評論・批評を執筆するライターとしても活動をしていた。そして、評論・批評を主要な要素とした「建築ジャーナリズム」の土壌をつくった人物とする研究が報告されている。

1.2 研究目的

建築ジャーナリズムというものが今よりも力を持っていた当時の『新建築』誌を研究することで、川添登が一体何を目指していたのか、時代背景がどのように関係しているのか、そこに岩田知夫の批評・評論が関連付けられていたのかを示すことを目的とする。

2. 岩田知夫の評論

「岩田知夫」は川添登が編集長時代に書いた評論の作者名、ペンネームである。そのことを軸に、当時の川添登の『新建築』誌における動向を岩田知夫が登場する名義で書かれた評論の特徴を軸に振り返る。

2.1 川添登編集長時代の『新建築』誌

川添登が編集長を務めている時代の『新建築』誌を調査した。文献の中で川添登は新建築問題によって『新建築』誌から離れることになるまでに行った建築ジャーナリズムの確立に向けた活動を 8 段階のフェーズに分けて説明している。簡略し説明すると、まず、初めに雑誌のあり方をひとつの評論のかたちで編集することから始まり、次に読者を巻き込み、建築批評を初め、建築評論を確立し、建築ジャーナリズムの土壌を整備し、日本建築界の現状を海外へ発信し建築運動を展開したという様に説明されている。

川添登のフェーズ分けの中で説明されている建築ジャーナリズムの土壌をつくっていたという箇所には既往研究では調査が集中している。しかし、そこが川添登の活動の全てではないため、もっと活動を詳細に調べる必要があるのではないだろうか。

2.2 岩田知夫の評論に見られる特徴

岩田知夫の評論にみられた特徴を述べる。岩田の評論、特に QQQQ という投書欄の評論には建築外の視点を用いて論じるという傾向がみられる。例えば、歴史学者である石母田正氏や、心理学の文献である。その投書欄に岩田知夫が現れなくなった後は建築家についての評論の他にも書評や展覧会についての評論を執筆し岩田知夫をライターとして注目した際に見られる特徴としては領域横断的に論じてようとしているということが出来るだろう。

2.3 岩田知夫の必要性

川添登は何故、岩田知夫のペンネームを用いる必要が

1: 日大理工・院 (前)・建築 2: 日本理工・教員・建築

あったのだろうか。当時の『新建築』編集部の状態を振り返る。当時の編集部の新入社員はすぐにやめていったと川添登は述べている。加えて、建築ジャーナリズムというものを確立させることを目指していたと述べている。

岩田知夫が初めて登場したのは読者投書欄である QQQQ だ。そして、川添登の他にも当時の編集部には宮内嘉久、平良敬一も同じくペンネームを用いて評論を執筆している。建築ジャーナリズムまた建築界を外へと開いていくためには内輪で評論を行っては前進を見込めない。そのため、ペンネームを用いることでフェイクであったとしても建築ジャーナリズムが外に開いている状態を作り上げる必要があった。そのため、川添登が編集長になった当時の QQQQ にはペンネーム用いた評論が多く掲載され、年代が進むにつれて実名で評論が掲載されるように変化していった。つまり、岩田知夫とはフェイクとして建築家達に建築界が外へ向けて開き始めているということ、そして、評論が内輪ではいけないという状況であることを伝え、そういう状態へと建築界を変革していこうとしていた思惑の元、川添登が記事を執筆する上で必要な名前であったのだと私は考える。

3. 時代背景との関連性

川添登が編集長を務めていたのは 1953 年～1957 年の間である。特徴的なのはこの期間が戦後復興から高度経済成長が始まる時期の境目に位置していることである。一般に戦後復興は朝鮮戦争の特需によって 1954 年頃に終わりを迎える。高度経済期へと移り変わっていくこの年代は建築ジャーナリズムにおける伝統論争の始まりの時期でもある。

3.1 川添登と岩田知夫

川添登の目標は建築ジャーナリズムの確立である。そして、建築界を変革していこうとしていた。既往研究で川添登は編集者、建築評論家であると語られる。しかし、当時の『新建築』誌を調査したことで川添登の目的を達成するために現れた「岩田知夫」という分身は当時の『新建築』へ他学問の視点を導入するような役割を担っていた。川添登によって変革された『新建築』誌上で生じた伝統論争は建築内だけではなく一般人を巻き込み芸術界などへ影響を与えた。それは現在の『新建築』誌に見られない資料としてある雑誌ではなく多方向へ意見を発信する媒体としての雑誌であった。岩田知夫は建築界と他学問や世間を繋ぐパイプであり、建築界を世間に向けて開いたものへと変革しようとしていた川添登はただの編集

者・評論家ではなく建築家の一面も持ち合わせていたといえるのではないだろうか。

3.2 時代背景と建築ジャーナリズム

このような川添登の建築ジャーナリズムにおける活動と時代背景を照らし合わせる。戦後復興が終わりを迎え、日本が新たな展開を見せるように変わっていく中で川添登の編集者ならざる独自の視点によってこういった活動が行われた。そこには川添登の日本の建築界を変革しようというただの編集者ではない意識が存在していたといえるのではないだろうか。

5. 参考文献

- 川添登 『思い出の記』 ドメス社 1996 年
 岩田知夫 「我らの資本家」 『新建築』 28 巻 1 号 1953 年 1 月号 p. 44
 岩田知夫 「タケテとバルーマ」 『新建築』 28 巻 2 号 1953 年 2 月号 p. 42
 岩田知夫 「力學と美學」 『新建築』 28 巻 3 号 1953 年 3 月号 p. 44
 岩田知夫 「蟻の饗宴」 『新建築』 28 巻 4 号 1953 年 4 月号 p. 50
 岩田知夫 「太陽暦と太陰暦」 『新建築』 28 巻 6 号 1953 年 6 月号 p. 42
 岩田知夫 「江戸城」 『新建築』 29 巻 5 号 1954 年 5 月号 p. 54
 岩田知夫 「近代建築批判の問題点—美術批評誌における建築論争批判—」 『新建築』 29 巻 12 号 1954 年 12 月号 pp. 5-6
 丹下健三 「近代建築をいかに理解するか—伝統創造のために—」 『新建築』 30 巻 1 号 1955 年 1 月号 pp. 15-18
 岩田知夫 「丹下健三の日本的性格—とくにラーメン構造の発展を通して—」 『新建築』 30 巻 1 号 1955 年 1 月号 pp. 62-69
 岩田知夫 「原爆時代に抗するもの 白井晟一論序説」 『新建築』 30 巻 4 号 1955 年 4 月号 pp. 42-44
 岩田知夫 「村野藤吾論」 『新建築』 30 巻 10 号 1955 年 10 月号 pp. 15-17
 岩田知夫 「マルセイユの住居単位」 『新建築』 30 巻 12 号 1955 年 12 月号 pp. 7-8
 岩田知夫 「誰のためのグッド・デザイン」 『新建築』 31 巻 1 号 1956 年 1 月号 p. 78
 岩田知夫 「伝統をどう克服するか？」 『新建築』 31 巻 3 号 1956 年 3 月号 pp. 72-79
 岩田知夫 「鋭い眼を背後で支えるニヒリズム」 『新建築』 31 巻 3 号 1956 年 3 月号 p. 80
 岩田知夫 「伝統と民衆の発見を目指して」 『新建築』 31 巻 7 号 1956 年 7 月号 pp. 13-16
 岩田知夫 「五期会批判」 『新建築』 32 巻 1 号 1957 年 1 月号 卷末記載話し手 川添登 聞き手 大川三雄 「仕掛けとしての伝統論争 戦略としてのスター主義」 『建築ジャーナル』 No. 863 1995. 05 pp21-28
 話し手 平良敬一 聞き手 藤岡洋保 「閉じられた建築家に風穴を開ける努力」 『建築ジャーナル』 No. 863 1995. 05 pp29-35
 話し手 植田実 聞き手 野沢正光 「ひとつの時代をつくった「都市住宅」の背景」 『建築ジャーナル』 No. 863 1995. 05 pp36-41